[報告 5]

ハトムギから始まった地域おこし

川上修（JA 氷見市代表理事組合長）

JA 氷見市の特色―経済事業に特化

氷見市は、能登半島の付け根、石川県と富山県の県境にある。寒ブリが有名で、日経新聞の「冬こそ食べに行きたい漁師町」では一番になった。人口は約 5 万人弱。中山間地で、農業的には条件不利地がほとんどだ。高齢化率は 30％を越え、限界集落もたくさんある厳しい状況は TPP 以前の問題だ。

農協の基盤強化は農協と関わる人間を増やすことが一番の方策だと私は思う。今、正組合員が 6,000 人弱、准組合員も入れて 1 万人。金融は 5 つに統合したが、旧村の 22 農協支所は組合員のライフラインを守るためにすべて存置している。

福祉事業に力を入れていて、2 つのデイサービスと 1 つのショートステイで、約 60 名の職員の増加をみている。また、行政も大変厳しい状況で、保育園の統廃合をしているなか、公設民営として保育園を 2 園、氷見市農協が経営している。ここに 4,000 万円ほどお金を使ったが、我々のところには見返りはない。これも「関わる人を増やす」という考えのなかでやっている。

別会社として、農業生産法人と、JIS という農協で扱えない保険を扱う店を 15 年ほど前からやって、365 日 21 時まで営業し組合員の利便性をはかっている。

農家ばかりの地域だが、直売所は約 2 億 4,000 万円の売上がある。直営は 1 店で、あと 7 つがスーパーのインショップだ。

ハトムギに取り組んだ背景

ハトムギをめぐっての取り組みをお話ししたい。湿田が多く、転作で麦・大豆はほとんど収穫できない、農業条件が非常に悪いところだが、ハトムギはイネ科の植物だから比較的水に強い、という特性を利用して取り組んだ。

ハトムギはもともと中国南部からインドシナ半島が原産で、中国では 2,000 年以上前から漢方として用いられていた。日本へは江戸時代に入って来たと思うが、薬用、漢方薬として使われている。イボ取りの薬として医者が処方しているが、我々は薬品という名前を使うと薬事法違反になる。健康と美容のための民間薬としても利用されている。

元々条件不利地で 1 戸あたりの面積が小さく、荒廃地がどんどん増えていくなか、農協として地域農業を守っていかなければならないと、平成 18 年に（株）JA アグリひみという法人を立ち上げたが、黒字にすることはなかなか難しかった。そこで、このハトムギ事業でなんとか黒字にしたいと思った。設立当初から黒字になるような仕組みをつくって、去年は 5,000 万円の利益を上げている。

外国産のハトムギは安く、市場では 300 円/kg 程度で取り引きされている。それをうちは 700 円/kg で買い上げている。なぜそれができるかというと 6 次産業化で、加工は委託しているが、販売は自分でやることで付加価値がつくのだ。

反収 150kg として計算すると、補助金も入れて 16 万 1,000 円の収入がある。費用は労働費も入れて 9 万円程度だから、10 a あたり 7 万円が残る。少なくとも、集落営農なり担い手の経営に寄与していると思っている。

ハトムギ事業による JA の地域貢献

このハトムギ事業をやることによって、いろいろと事業が進んできた。始めたのは平成 17 年頃、今は年間 200 万本を売る。いろいろな方々との連携も

含めると、年間 300 万本のハトムギ茶を製造販売している。

大きな農業地域ではないから、観光や商工、漁業、行政すべてを巻き込んでハトムギの特産化を計り、地消地産、循環型の発展を目指している。

その売上金、収益金は行政に寄付している。1 本売り上げるごとに 5 円。氷見はハンドボールが非常に盛んで、毎年 3 月に全国から何千人の中学生、その父兄と指導者が訪れる。それを氷見市は 10 年間引き受けたものだから、大変金に苦労している状況で、私は市に「市民の皆さんがハトムギ茶を飲んでくれたら 1 本 5 円を寄付します」と申し上げたら、市長自らトップセールスしてくれた。そのおかげで大変売上も伸びてきた。そういう意味で、行政ともうまくやっている。昨年 12 月には、氷見市に 1,000 万円の目録を渡して観光振興に使っていただいている。

2 園持っている保育園の子どもたちに氷見のおいしいお米を食べさせてあげたい。そこで、先ほどの 1,000 万円のなかから 350 万円を寄付して、氷見市農協が氷見市の全保育園の米代をすべてまかなっている。こうした地域に対しての事業に、ハトムギの収益金を使っていることもひとつの特色だ。

そのほかにも福世華劇団という劇団をつくっている。老人会などから頻繁にお声がかかるので、休みなく自主的に活動している。

ハトムギの全国生産は、輸入物も合わせると約 1 万 t だが、国産は 1,000 t 程度だ。岩手県の花巻や栃木県が多かったが、震災の影響で少し様相が変わり、うちは後発だったが、今は全国で一番。富山県では JA 氷見市と JA いなばがやっている。

氷見ハトムギ物語

氷見市のハトムギには歴史があり、農協がハトムギ事業に取り組むまでは、細越地区の人たちが昭和 60 年代からハトムギ茶を細々と続けてきた。そのおかげで、うちの事業につながった。この商品は、平成 17 年まではだいたい年間 500～600 万円の売上を、農協の集落座談会などで使ってもらうことで維持してきた。今現在、ここのお母さん方は、年間 3,000 万円の売上をあげている。これが第 1 期だ。

そして私が平成 17 年にこのハトムギ茶に取り組み、1 年間で 50 万本の製造にまでこぎつけた。それまでには、先ほどのハンドボールのご縁や、マスコミが取り上げてくれたこともあって（マスコミに取り上げてもらうと、金もかかるが、それだけの見返りもある）今は年間 200 万本。他の JA さんのものも含めて年間 300 万本という状況だ。

金沢大学にハトムギを研究している先生がおり、ハトムギのエキスの特許をとっていた。ここから産学連携のハトムギ戦略が始まった。それまで我々が取り組んできたハトムギの事業よりも、より付加価値の高い、そして機能性を持ったものを開発したいと、金沢のベンチャー企業と連携した。農商工連携の事業認定を受けて、国から 3,000 万円の補助金をいただき、全体として 4,500 万円でハトムギエキスをつかった商品開発を行なった。これが第 3 期。

平成 23 年からは第 4 期として、ハトムギのメジャー化を企てている、このエキスをつかってもっと大きく飛躍したいと、金沢の先生方とともに PR 活動や販売戦略を練り、エビデンス開発、情報開発、情報を広範囲に発信していこうと進めている。また、うちのハトムギの商標を全国で使ってもらえればと思っている。

私は 6 次産業を意識していたわけではないが、やってきたことが 6 次産業化につながってきたという状況だ。ハトムギに取り組んで、少しでも地域の農業者に還元できればということでがんばっている。